

# アトリエ通信

号数  
創刊第2号

発行日  
聊 61 年10月10日

発行場所  
釧教大絵画研究室

雑 感

新井 義史

爽やかな秋空の元、いま釧路は一年のうちでも、最もすがすがしい気候に恵まれています。皆さんお元気のことと思います。つい先日、創刊号を出したばかりの気がしますが、もうあれ以来、5ヶ月がたってしまいました。日々の過ぎ去ることのなんと速いことか。

子供が生まれました。女の子でしたので、碧と名づけました。早くも生後 100日を迎えました。なかなか可愛い、と周囲の評判です。子供は可愛いがしかし、子育てはきわめて大変です。育児に関連したもろもろのことに、自分の時間がどんどん削り取られてしまいます。ことに、私の妻は、私の仕事をそのほとんどが「遊びのたぐいである」ときめつけていますので、帰宅後の私がのんびりしていたりすると、目ざとく見付け、次々に用事を押し付けてきます。主婦稼業が大変であることは重々承知していますが、これではたまたらんと、最近あまり家に帰らないようにしています。おかげで近ごろは仕事ははかどりますが、これでは家庭不和につながると、それもほどほどにしています。

「学生時代の生活は、ほとんどその後の生活の暗示である」ということについて

人間を20年もやっていると、その人なりの生活パターンというか、人生観とでもいえるものが決まってしまうような気がします。簡単な例で言いますと、学生時代に金に困って借金ばかり繰り返している者、逆にどういうわけか、そんなに金に恵まれているわけではないのにリッチに暮らしている者。また、はたから見て不思議なほど、毎日毎日忙しそうに飛び回っている者と、驚くほど哲学的にな〜んにもしない者など。

いうまでもなく、現在の大学生生活は人生のオアシス、あるいは温床であるわけです。その十二分に与えられた「自由」さの中で、その人の本質的な人生観が生活パターンとなって全面的に現れいでるわけで、悲しいかな、これら学生時代の生活ぶりは、その後、実社会に出ても変化なく続くということです。

学生の頃に制作しないで、かつ「卒業しても絵はつづけます！」と平然と言う人がたまにはいますが、全くその無神経ぶりにあきれます。ぐうたらぐうたら何ら勉強しないで卒業した人を思い出しては、きっとあいかわらずの生活振りだろうと想像してしまいます。卒業生には厳しい言葉になるでしょうが、これは、いかに学生生活という自由に満ちた時期の使い方が大事であるかの裏返しであり、在校生はここのところをしっかりと受けとめて

欲しいものだと考えます。

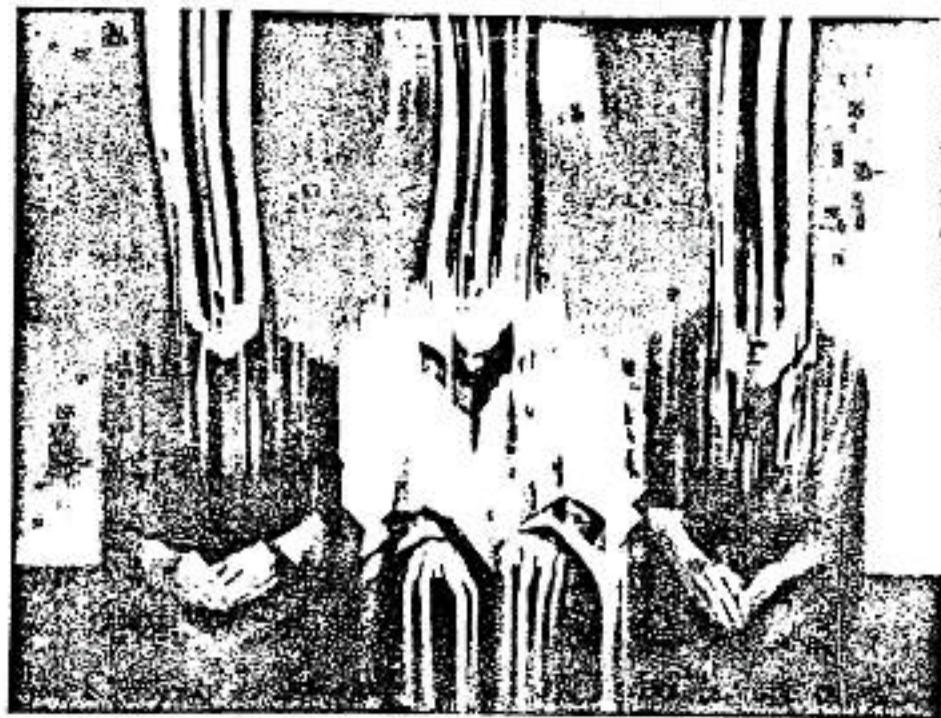
9月末で私の今年の制作もひと区切りつきました。転居、出産、育児と、制作に対してはほとんど暴力的な制約の連続でしたが、5ヶ月間で仕上がった作品が計500号分でした。昨年が700号でしたから、やはり大分ペースがおちてしまいました。毎年1000号突破を目標にしているのですが、中盤以降中だるみ、後だるみとなり挫折感にさいなまれています。しかし、来年はきつといけそうです。

つい先日、CD対応のラジカセを研究室に導入してしまいました。自分で言うのもへんですが、新製品には目がないものですから、これまであったデザイン室からのおさがりのカセットが使えないラジカセがついにラジオも聞こえなくなってしまうことを言い訳につい買ってしまいました。ある学生からは「いつまでたっても子供みたいなんだから」と実のところ、胸にグサッとすることを言われたりもしましたが、しかし、制作しているときにはBGMとして、これは大層有益です。ほうっておいても繰り返し繰り返し、いじましいほど良く働いてくれますので、精神が中断されません。

アトリエでは相変わらず低音の良くこもったスピーカーから、渡辺君ごのみの日本人のロックが鳴り響いています。そろそろあれもグレードアップすべき時が来ている気がします。今年の卒業記念品に期待することにしましょう。

前回お約束しました新装なったアトリエの使用状況の報告は、語るも涙、聞くも涙の悲しい現実ですので、在校性の奮起を期待して再度次回まで延期したいと思います。

「また、そんなことして遊んでる！」との妻の言葉を背に。写生旅行の前日、10月5日



「後悔のリズム」F150号 861.9.新道展出品作

例年どうり今年も7月半ばに、市立図書館にて丘馬展がおこなわれました。ここでは、各人の作品のなかから一点をとりあげ、簡単かつシビアに評してみたいと思います。



大橋 拓 (2年)

資質としては、なかなか良いものを持っている。物を見つめることができている。

しかし、何といても、精神的にきわめて軟弱な点がネックとなり、今後の成長がほとんど期待できそうにない。

とにかく、休暇になると必ず「いない!」ということからしてなにか考え違いをしているようである。

学生にとって休暇は休暇ではなく、自学自習の絶好の機会

であるはず。今後もそのことに気づくことなく「不在」を続けるようであれば、前回自分で言っていたように本格「破門」としたい。(註 私は言った覚えは無い)

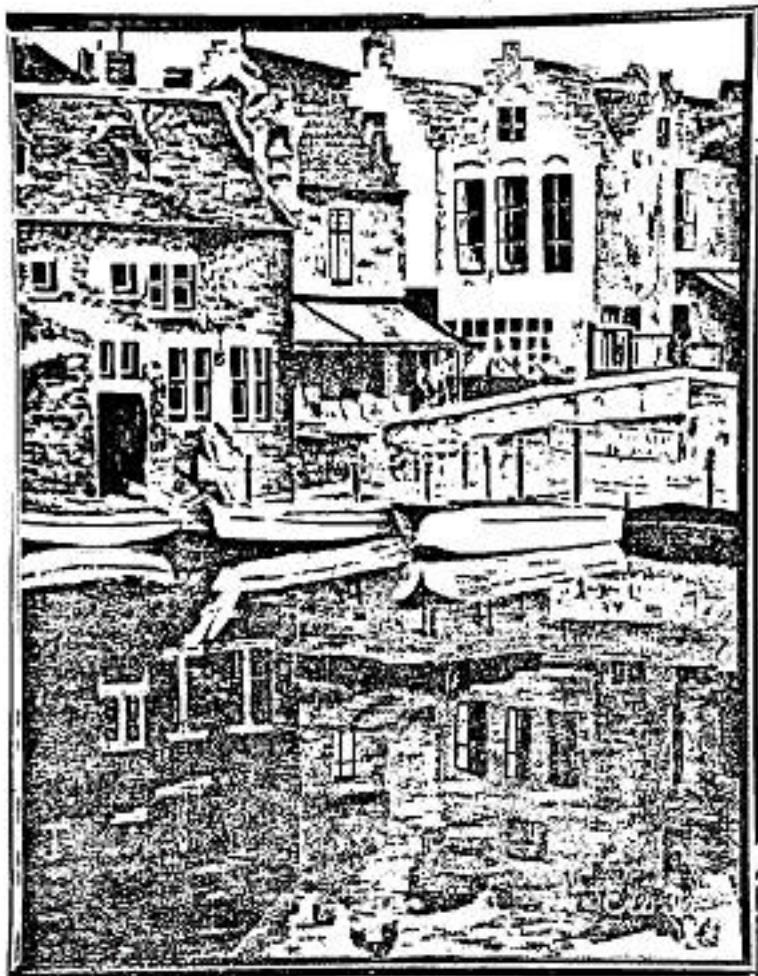
「珠磨かざれば光なし」要注意人物!

松久 充生 (2年)

「表現」することの「精神」を最も優先させようとする姿勢があることは、大変望ましいことである。まだその「精神」の目標が定めきれないであがいている様子が良く「表現」されている。

しかし、最小限の技術的裏付けが無いことには、絵画として成立しない。何も考えずに、とにかく1年間、だまされたと思って、簡単なモチーフを組み、自分の目で確認した事実を確実に表すことに、じっくりと取り組むことが最も必要。そして、今その機会を逃したら、一生浮かびあがれないと言える。要注意人物その2。





伊藤 絵理 (2年)

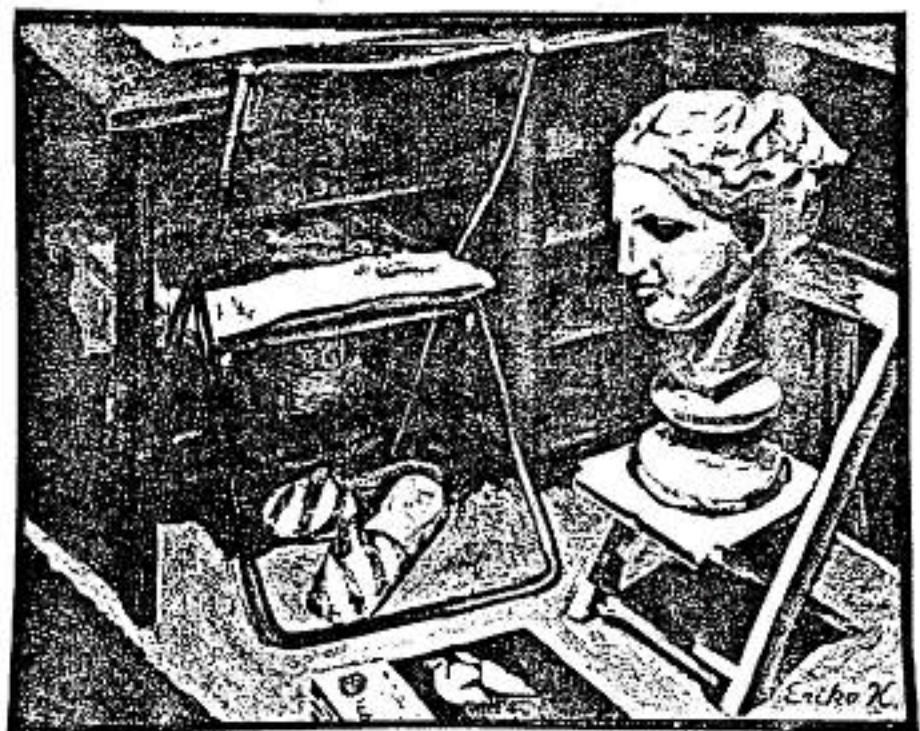
素直で真面目な性格が、そのまま絵になったよう。2年のなかでは一番成長してきているしかし、一枚の小さな観光写真から50号の油絵をでっちあげてしまおうという、その大胆で無頓着ぶりには驚かされる。それでは、高校の美術部の生徒なみではないか。

小学校の絵の指導が、身の周りの事物を観察することから始まり、主観から客観への変化、次第に画面全体への配慮がなされるようにそうした段階を自分で組み立て、そのスケジュールを消化していけるような、そんな自主的な活動が望まれる。

画面の絵具の状態をみていると、本物の油絵を良く見ていないと思われるふしがある。悪い絵を見ると目が悪くなるからむしろ見ないほうが良いが、良い絵を実際に見る機会を出るだけ増やすことが必要。

河村 絵理子 (3年)

2年生がまだ自分が何をやっているのか解らずにいるのと違って、3年生には、自分の絵に或る程度の責任があるはず。絵画表現には、技術的な面と精神的な面とが共に必要であるが、彼女には後者における精神面の主張が、ほとんど無い。3年生での活動は、基本的な技術を越えて、次なるステップ、つまり主観的表現への入り口にたたさされている段階であると言えると思うのであるが、自分で枠をつくってしまい、それをのり越えようとだに考えないところが最たるウイークポイントである。頭が硬い、頭が軽いと言える。



篠塚 智子 (3年)

この半年間で最も目ざましい進歩を遂げた一人。春休みには、目的がさだまらず、ウロウロしていたものだが、あれもこれもと欲張らずに、モデルを使っての人物一人。このテーマで数ヶ月追及してきた成果が結実してきている。

人物に対する主観的な見方、それに対しての空間の処理など、物のとらえかたの基礎的な目が一応出来上がってきた。

次の段階としては、テーマ、モチーフをいかに組むかということであるが、この段階は肝をすえてじっくり取り組む必要がある。基本的な描写力を得た者のうち、8割りはこの段階でいきづまり挫折する。つまり「自分にとって表現すべき内容」が見付けられずに終わってしまう。したがってここで何が必要かといえ、描くことと併せて、多くの作品を見ることと、美術史を知ることである。

今後の一年間でそれがどこまで達成できるか。



宗森 研介 (3年)



写真で見ると意欲的な構図で、案外サマになっているように見えるが、実は技術的にはまだまだ未熟である。単なる再現描写の域にあきたらず、主体的な画面づくりにとり組始めたその意欲は買うことができるが観る人に訴えかけることができるためには画面に置かれた絵具が、絵具と感じられないような、そんな別の実在性を持たせられるような方法の習得が必要になる。それは「技術」に他ならない。

彼の表現傾向は、どちらかといえば、表現主義とよびうるものである、この傾向は、精神表出のためにはむしろ反技術主義の立場をとるわけであり、このあたりの解釈の仕方が、今の彼にとっての課題であろう。

菅谷 誉紫子 (4年)

さすがに4年にもなるとうんぬんと、書きたいところであるが、そう言えない所が苦しい所である。昨年からの制作量を見てみると、決して少ないほうではない。しかし、画面から観る者に訴えかける重要な「何か」が感じられない。

この言葉で言い表せない「何か」が表現にとっては、最も大切な要素であるわけだが、何かと忙しい彼女にとって、この要素を育成する機会を見出す時間がこれまでに無かったようである。

かの有名なポーリンガーの感情移入説の立場からこの絵を見ると、描かれた人物に観る者の感情が移入出来ないことが解る。これは、具象画にとって致命的な欠点であり、これを自分なりの方法で解決しえない限り、絵を描く楽しみを味わえないのではないだろうか。研究心を持って、あと一步奮起すべし。



渡辺 弘樹 (4年)



地道に描写力がついてきているといえる。この作品はテンペラが基本になっているが彼は、これ一作でこの技法を諦めた感がある。「あたりまえの絵などは描きたくない！」という強い信念のもとにここまで来たが、それにしては、描写に対する執念、そして、忍耐力、系統的な研究心それらの不足がその信念を裏付けるに至っていない。卒制のための習作には取り組み始めている訳であるから、何をおいてもまず、我慢してじっくりと「画面の前にいる」ことを優先して、4年間の締めくくりをしてもらいたい。

10月6日～9日にかけて、新開拓の地屈斜路湖畔の北見工大の研修所にて写生旅行がおこなわれました。ここ3年間は5～6月に実施してきましたが、今年は宿泊所の関係から、秋にズレこむことになりました。

思うに、一昨年までの写生旅行は、雨また雨の怨念刀、そして霧また霧のあっ消しと、まったく天気恵まれませんでした。昨年の函館は久しぶりにまあまあの天候で、写生旅行とは卓球部の合宿では無いことが明らかになりましたが、さて、本年はいかに？

天候一覧表 制作

初日 小雨のち雷を伴う雨 決行

2日 小雨のち断続的な雨 決行

制作終了後快晴に転

3日 曇り、冷風吹く 決行

4日 台風による強風、曇 中止

最終日はついにあきらめて帰ってくるや釧路はなんと快晴と、一昨年までのパターンでした。

さて、かんじんの写生地は、第一に川湯温泉方面から望む「硫黄山」、第二に野上峠から見下ろした「硫黄山と屈斜路湖」、第三に和琴半島付近の丘から見下ろす「牧草地と屈斜路湖」と、なかなかバラエティに富んでいました。

私の車2往復で全員がまるで囚人のごとく移送されたため、重い画材をかついで歩き回る苦痛は無いものの、自主的に場所を選定することはできなかつたといえます。

人間には学習能力があるはずなのですが、今回3度目のW君は、何とまたもやイーゼルを持ってこない！というふとど

き千万な行為を繰り返し、なおかつ、雨具の用意すら無いという考えられない極悪非道振りを発揮しました。

2年のO君は雨具とキャンバスクリップを忘れ、M君は雨具を忘れました。

年に一度の写生旅行に懸けるこうした熱意の欠如を戒めるために、上記の3名は、冷たい雨の吹きすさぶ野上峠でずぶぬれになりながら3時間程おしおきを受けましたしかし、私は根がやさしいものですから、川湯温泉のみやげ物店でビニールのカップを買ってきてあげましたが、W君とO君は厚着をしすぎていたために、着たとたんとそのカップが破れてしまい、ここでも物を大切にしない粗雑な行為を周囲に披露しました。

頭上を雷が駆け巡るなか、冷風吹すさぶなか、雨の降りしきるなか、「怖い」「寒い」「帰りたい」そんな懇願にも、唯一の移動の手段を握っている私の無視によってイヤイヤモクモクと制作は続けられました

しかし、終始雨に脅かされての制作のわりには、各自2～3枚が仕上がり、内容的には、まあまあの成果といえるだろうと思います。

宿泊費は3泊4日3食付きオール込みで何と3200円、交通費は約3000円と、今年も超安上がり、また食事内容も値段の割には、なかなか好評でした。

写生地までの距離が多少問題ではありますが、ボンゴ車でもレンタルできれば、写生旅行のサイクルのひとつとして組入れることができるでしょう。

ともあれ、今年の写生旅行も絶好の精神鍛練の場として？、無事に終了いたしました。  
10月10日 新井 記

- ☆ 8月のお盆の頃、南方の出身地に就職した御人が、相変わらずのビーチサンダル履きの姿で釧路を再訪しました。アトリエ入り口脇の黒板に、厚かましくも独特のサインを書き残していきましたが、誰も消す者無くいまだに残っています。
- ◎ 上記の頃、川守田、金阿弥、佐久間の3名来釧。この4名は偶然の再会に胸うちふるわせておりました。
- ウッカリと免許の更新を6ヶ月以上忘れてしまった「K」先生、ン回目かの再試験にくじけることなく挑戦し、やっと取り戻しました。
- 安永秀子さんが、「旺玄会愛媛支部展」9、22～9、28 に出品し案内状が届きました。「先日、川守田君が愛媛にやってきたので愛車MINIKAで高知の足摺岬まで行ってきました スイ」と、書いてありました。それにしても川守田君は何をしているのでしょうか。
- △ 8月の初め頃だったでしょうか、3年の宗森君が「釧路空港で松隈サンに会いましたよ。中国に新婚旅行に行った帰りだそうで」と言っておりました。
- ⊗ デザイン4年の鶴沼、田中の両君が山形市、札幌の印刷会社に就職が内定しました

編集後記

アトリエ通信第2号をお届けします。今回こそは学生に編集を、と考えていたのですが夏休み期間の9月一杯は、登校する学生もほとんど居なくて、またもや私の独断と偏見による、責任編集になってしまいました。

前回の約束では、9月発行の予定でしたが、多少遅れてしまいました。また、年に3度の発行は、なかなか厳しいのではないだろうか、との感じもしないではありません。そこで、こういう事は無理をするとたちまち挫折してしまう事柄でもありますので、予定を変更して、年に2回の発行としたいと考えます。したがって、次回は62年4月発行予定とします。費用の方ももうすこし様子を見たいと思います。

次回の特集のテーマは、1「卒業生の現在の生活から」と銘打ち、各年度の名簿順に、一人ずつ、つまり**神、小林、内山、秋山、川守田**、の五名に原稿を依頼したいと思います。現在の生活の感想等、思い当たることを気ままに書きつづってもらえたらと考えます。分量は800～3200字程度（写真等の組込み歓迎）とします締め切りは 第一次 12月1日とし、それまでに届かない人には、改めて年賀状にて催促いたします。よろしく協力願います。

10月10日 新井